

組織目標評価報告書（令和3年度）

部局名：

資源植物科学研究所

部局長名：

平山隆志

目標・取組	目標・取組の実施状況(成果)及び新たに生じた課題等 (部局での検証とそれに対する取組)
<p>①教育領域</p> <p>当研究所は環境生命科学研究所・植物ストレス科学講座として大学院教育を実施している。優秀な学内外の大学院生・留学生の獲得のため、学内外の学生に向けた情報発信を行う。また、進学した大学院生の個々の能力を活かす教育・研究指導を実施するための方策を検討し、優秀な人材育成を目指す。</p> <p>「教育の実施体制」について (1)学部教育(農学部等、1、3、4年生)への貢献・大学院生指導の充実 「教育方法・内容」について (2)グローバル人材養成のための英語講義の拡充 「教育の成果(学習の成果)」について (3)大学院生による研究成果発表・学会発表の支援 「国際共同研究による教育の状況」について (4)国際共同研究を基盤とした大学院生の受け入れや国際学会等での発表推進 「外国人留学生の受入状況」について (5)国費留学生の採択などによる外国人留学生の受入 「学生支援」について (6)留学生を含めた大学院生サポート体制と大学院説明会の充実</p>	<p style="text-align: center;">関連する 年度計画の番号</p> <p style="text-align: center;">29-1</p> <p>教育領域における目標・取組の実施状況及び新たに生じた課題等</p> <p>「教育の実施体制」について (1)農学部1年生向けの講義を実施し、学部教育に貢献した。 「教育方法・内容」について (2)全研究グループによる博士前期課程学生向けのオムニバス形式英語講義Advances in Plant Scienceを実施した。 「教育の成果(学習の成果)」について (3)所内大学院生全員による研究発表会(論文発表会、論文中間発表会)を実施した。 「国際共同研究による教育の状況」について (4)海外の若手研究者間の交流を目的とした国際フォーラムを主催し、大学院生を含む22か国のべ229名の若手研究者が参加し、活発な議論が交わされた。 「外国人留学生の受入状況」について (5)受け入れた13名の院生のうち留学生が7名をしめ、在籍する大学院生25名中留学生は半数以上の13名である。 「学生支援」について (6)部局独自の給付型奨学金制度により留学生を中心にサポートを行った。定期的にオンライン大学院説明会を開催(計8回)し、大学院に関する情報発信を継続的に行った。</p>
<p>②研究領域</p> <p>全国共同利用・共同研究「植物遺伝資源・ストレス科学」拠点として、インパクトの高い論文成果の発表、それを支える競争的研究資金の獲得に努める。また、研究集会等の開催、国際交流協定に基づく国際共同研究により国内外の関連研究分野コミュニティの活性化を進める。</p> <p>「共同研究拠点活動」について (1)共同研究の受け入れと研究支援 (2)遺伝資源および植物ストレス科学に関するシンポジウム等研究集会の開催 (3)国内外の研究機関との連携活動 「研究水準及び研究成果等」について (4)高被引用論文(Top1%論文)の排出 (5)競争的研究費の獲得増加 「研究実施体制等の整備」について (6)次期拠点事業に沿った研究組織体制の再編・強化 「国際共同による研究の状況」について (7)国内外の研究機関との部局間協定に基づく国際共同研究の実施 「女性・外国人研究者の受入状況」について (8)女性・外国人研究者の積極的な受け入れ</p>	<p style="text-align: center;">関連する 年度計画の番号</p> <p style="text-align: center;">29-1</p> <p>研究領域における目標・取組の実施状況及び新たに生じた課題等</p> <p>(1)共同研究をこれまでの一般研究に加え、重点研究および若手奨励研究の区分を設け公募し、それぞれ、44、3、4課題を採択し、共同研究を実施した。 (2)第37回資源植物科学シンポジウム及び第13回 植物ストレス科学シンポジウムをオンライン開催し、247名の参加者があった。 (3)ドイツ、エチオピアとの国際共同研究を2件を採択し、実施した。 (4)高被引用論文(Top1%論文)の排出を促進し、研究所所員2名がHighly Cited Researchers、2021に選出された。また、馬教授が日本植物生理学会賞を受賞、佐藤教授が日本農学賞を受賞した。 (5)科研費の取得増加のため、所員による申請書添削を継続的に実施、R3年度は、基盤S2件を含む科研費申請が採択され、採択率が前年の33%から60%まで増加した。次年度の申請に向け、5年以上採択を逃している教員と個別に面接し採択に向け可能な対応について協議を行った。対応した4名のうち、3月1日時点で2名の申請の採択が確認された。 (6)次世代作物共同研究コアで実施中の若手研究者主導の研究所横断的研究をサポートするとともに、新たな研究チームの構築に向けた協議とその提案を後押しした。 (7)RECTORプログラムの推進し、国際拠点形成に向けた取り組みを行った。 (8)女性のテニュアトラック助教を採用した。</p>
<p>③社会貢献(診療を含む)領域</p> <p>当研究所の地元、倉敷市の高校生や一般市民を対象とした講義などを通して、地域社会との連携を進める。また、当研究所が保有する研究資源を活用した社会貢献、地域貢献を新型コロナウイルス感染症の対策を考慮の上可能な形で進める。具体的には、市民を対象とした教育プログラム、研究所における体験プログラム、公開講座などを実施し、地域社会との連携の強化をはかる。また、保有する研究資源の積極的活用による作物の改良などにより、社会に貢献する。</p>	<p style="text-align: center;">関連する 年度計画の番号</p> <p style="text-align: center;">29-1</p> <p>社会貢献(診療を含む)領域における目標・取組の実施状況及び新たに生じた課題等</p> <p>(1)高校生を対象としたサマーサイエンススクールをオンラインで実施し(8月2日)、17名の参加があった。 (2)倉敷市との連携活動として、倉敷市大学連携公開講座(2講座)を対面(10月16日)及びオンライン(対面の様子を後日YOUTUBEで公開)で実施(10月16日)、それぞれ16名、18名の参加があった。 (3)予定していた、研究所一般公開は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止したものの、高校生の見学は2校29名を受け入れた。 (4)ゲノム編集技術を用いて作出したコムギ系統の実証実験を開始した。</p>
<p>④管理運営領域</p> <p>合理的かつ効率的な業務遂行が可能となる管理運営を心がけ、コスト意識と戦略的な資源配分を前提とした経営的視点を持ち、予算執行の適正化及び効率化に努める。</p> <p>「部局運営体制の改善強化」について (1)効率的かつ効果的な部局運営を心がける 「部局組織の活性化」について (2)若手研究者の活性化を推進するための組織再編 「効率的・戦略的な予算配分・執行」について (3)コスト意識と戦略的な資源配分を前提とした経営的意識を心がける 「安全衛生に対する配慮」について (4)危機管理・安全衛生に関する意識向上のため講習会等を継続に実施する 「施設整備の推進」について (5)環境負荷低減のための取り組みを推進する 「法令遵守の徹底」について (6)研修等による運営に関する法令等の周知徹底と遵守意識の向上をはかる</p>	<p style="text-align: center;">関連する 年度計画の番号</p> <p style="text-align: center;">29-1</p> <p>管理運営領域における目標・取組の実施状況及び新たに生じた課題等</p> <p>(1)所内委員会の改廃を行い、効率的部局運営の実施を目指した。 (2)若手研究者の活性化を推進するため、准教授会の設立を促した。 (3)共通利用機器の外部利用を活性化するための、利用料金徴取システムと受け入れ体制づくりを行った。 (4)危機管理・安全衛生に関する意識向上のため講習会等を継続に実施した。 (5)環境負荷低減のため、老朽化した空調設備の更新を行った。薬剤等の環境排出の厳密な管理を行った。 (6)運営に関する法令等の周知徹底と遵守意識の向上をはかるため、情報セキュリティe-learningによる研修受講を促し100%の受講率を達成した。また、個人情報保護教育研修や文書管理研修の受講を強く促した。</p>